

## 安岡章太郎文学における〈父と子〉

—「家族団欒図」「ソウタと犬と」を中心に—

楊 琇 媚

### はじめに

「父」との対立や確執、或いは反抗を経ることによって初めて「子」の自立や自己確立がなされるという図式は、近代日本文学においてはしばしば見られるパターンの一つである。しかし、安岡章太郎の小説の中で描かれる「父」は、父としての権威を持たない人生の挫折者であることが多く、それによって、主人公「子」にとつての「父」は、むしろ反抗や対立のしようがない、ただ違和感を感じるに過ぎないような希薄な存在として描かれるにとどまっている。そして、そのことは、安岡自身の実父との関係性とも無関係ではない。

安岡の父・章は、かつては職業軍人（陸軍の獣医）であり留守がちでもあったが、敗戦によって帰還してからは、定職に就かぬままほとんど無為に老後を過ごすのみであった。この辺りの事情は、彼の諸作品の中においてもありのままに近い形で描き込まれており、安岡の読者なら誰もが知るところである。

ところが、安岡文学研究において、江藤淳の『成熟と喪失―“母”の崩壊―』（河出書房新社、昭四十二年六月）以来、母子関係を主題と

したものが論究の中で大きな比重を占めてきたのに対し、父が描かれた作品群を丹念に読み込み、そこに描かれる父子関係を追究したものは極めて少ないと言つてよく、父について考察した論文にしても、作中における父性喪失に注目して、「安岡の八月十五日症候群のひとつに父——家長制下の家長としての父の否定があつた」など、そこに「父の否定」を見る傾向が一般的であつた。<sup>(2)</sup> 個々の作品を取り上げ、作中に描かれる父子関係、特に主人公の息子が持つ父に対する複雑な感情<sup>(3)</sup>を細かに検討したものは未だ充分とは言えない状況にある。では、安岡が無能な父を描いているという事実は、果たして単に「父の否定」<sup>(4)</sup>を意味しているに過ぎないのだろうか。本稿では安岡の父の死の前後に書かれた作品「家族団欒図」<sup>(5)</sup>（昭三十六年八月）及び「ソウタと犬と」<sup>(6)</sup>（昭四十三年一月）を対象として、作品内でどのように父親像が造型され、また父子関係が描かれているのかを——特に主人公である子の心理描写の変化に着目しつつ——細かく検証していくことで、安岡文学の読みに関する新たな視角の提出を試みてみたい。

### 一、「家族団欒図」について

「家族団欒図」は昭和三十六年八月に『新潮』に発表されたものであり、安岡章太郎の短編作品の中で、「最も私小説的感覚の濃厚な作品である」<sup>(6)</sup>と評されている。

「年ごとに私は父親に似てくるさうである。母親が生きてゐたころは母親がさう云つたし、いまでは女房がさう云ふ。いづれの場合にしても、それを云はれるたびに私はイヤガラセを受けてゐるやうな気持ちだ」という、安岡の作品に一貫して見られる、父親への嫌悪感を思わせる書き出しから作品が始まる。敗戦によって軍人の地位を追われ生活の手段を失つたまま年をとつた父は、母の死後の後片付けを終えたあと、郷里から〈私〉のもとへ上京して来る。ちょうど「戦後は終わった」というキャッチフレーズが流行している頃であつた。そして、この頃の〈私〉もようやく戦後の混乱期から抜け出し、妻と一人娘とともに戦後の平穏で幸福な家庭を築き始めた頃であつた。しかし、突然闖入してきた父が、〈私〉の家庭に波乱を巻き起こすことになる。それによつて、〈私〉と妻と父の三人の間にも様々な心理的な紛糾が生じてくるのだが、結局、妻の提案で父は再婚することになる。その結婚式場で、正面のガラス戸に映つた人影が、〈私〉の目には瞬間的に父だと思われたのだが、実は自分自身の姿であつたことに〈私〉が「ギクリ」とさせられたところで小説は締めくくられる。

三島由紀夫は「創作合評」で、この作品は「完成された作品」<sup>(7)</sup>というより、安岡の「危機」や「展開点を暗示している小説」<sup>(8)</sup>だと評している。また谷川充美は、主人公自身の「責任」としての『戦後』の精

算と克服の問題」やその「責任を肩代わりしてくれる存在」としての妻の機能に着目し、作者はこの作品を「父子の物語のように装」つていると述べており、『家族団欒図』における新しい『家族』と『家庭』と『戦後』は、父子の問題と平行して、別の基軸を為している<sup>(9)</sup>と論じている。しかし、父に対する〈私〉の心理描写の変化に焦点を当ててみると、(結論を先取りして言えば)本作品は、妻を媒体とすることによつて〈私〉と父の関係性が再構築される過程を描いた物語として読むことができ、その意味から言つても本作は紛れもない父子の物語だ、ということが出来る。以下、この点について詳しく考察していきたい。

### 一―(二)父に対する〈私〉の両面的な感情

さきにも触れたように、〈私〉は年ごとに父に似てきたと母や妻に言われるたびに嫌悪感を覚える。なぜなら、父の容貌は「眉目秀麗」ではなかったからであり、そうであるがゆえに、自分自身が父親似の醜男であるという事実を「遺伝学的に納得させられ」、〈私〉にとつては「何とも責任のとりやうのない問題を押しつけられてゐるやうな気分」になつてくるからである。ここでは、父に対する〈私〉の態度は相当冷淡なものだと見て取れる。そこで、友人の父親に関するエピソードが持ち込まれる。

友人の父は銀行で定年退職を迎えると、「毎朝、マキを割つて飯を炊くやうになつた」。しかも、朝起き抜けに薪割りをするため、近所迷惑

になる。そんな父について、友人は口元に悲愴な笑いを浮かべて「注意してやりたいんだが、いざとなると可哀さうな気がして、それも云へないよ。とにかく目下のところ、親ちにとつちやそれが唯一の娯楽なんだから」と語る。こうした父の行為を眺める友人の視線からは愛憎入り混じった複雑な感情を読み取ることができる。しかし、これは作品の構造上、友人の父親にまつわる単なる一挿話として置かれたものというにとどまらない。というのも、〈私〉の父の場合もこれとほとんど類するような関係として描かれているからである。

〈私〉・妻・娘の親子三人の暮らしにとっては「格別小さすぎもしなかつた」「十二坪半の公庫住宅」であつたが、そこに父が加わることになり、一挙に「手狭」になつた。だが、それよりも〈私〉を困らせたのは父がつれてきたニワトリであつた。「軒下四尺五寸ほどの家のまはりに空地があるだけでは、ニワトリを棲まはせるための日当りと風通しの好い場所」がないにもかかわらず、〈私〉の仕事部屋の窓の下に「金網をはつてかこふことにし」た。こうしてやむを得ず父にニワトリを飼わせてあげることにしたのだが、終戦後の数年間、父はニワトリやアンゴラ兎の飼育に失敗し、家計を窮乏させることを繰り返してきたという過去もあつた。もちろん、今の〈私〉の職業は不安定ではあつたが、「父の養鶏で助けてもらはうとは思はない」し、助けてもらえるとも思えなかつた。にもかかわらず、〈私〉が父のこのような行動を止めようとしなかつたのはなぜか。おそらくそれは〈私〉の言うとおり、父が「何かせすにはあられなまま、終戦後の生活の習慣をまもりつづけてゐるだけのことかもしれない」ために、その僅かな「娯楽」を

奪うわけにはいかないという思いに苛まれたからである。ここでは、父に対して〈私〉が同情的な思いを抱いているという事実がうかがえる。そして、この時の〈私〉の心境は先述した友人の気持ちとほとんど重なり合うものでもあつた。

養鶏のほかにも父は、「垣根の植込込みをいぢくつたり」、不細工な置物を作つたりもしている。父のすることに対し、〈私〉は「閉口」したり、「煩はし」く思つたりもしているのだが、やはり積極的に止めようとしない。その代わりに、「里子に出してあつた大きな子供を家につれもどして育ててゐるやうな気持で」眺めている。ここにもやはり父に対する同情や寛容の感情を見て取ることができる。

このように、不細工なものを作つて、散らかしっぱなしにしたり、その製品をあちこちへと並べる、いかにもいたずらつ子であるかのような父を、〈私〉はただ傍で見ているだけなのだが、友人の父の場合と同様に、生きがいの見出しにくい生活をしている父を「マザマザと目のまへに見せつけられることは」、息子である〈私〉にとつておそらく「苦痛」なものであつたに違いない。なぜなら、父は両親であり、家族であるからだ。そして、このことは〈私〉にとつて否応なく受け入れざるをえない事実でもあつた。そのことは友人の経験談を通して、既に〈私〉にも強く思い知らされる事柄であつたと思われるからだ。こうしてみると、友人の父親の話は単なる一挿話あるいは他人事であつたわけではなく、むしろ〈私〉自身の父に対する感情や考えを代弁するような機能を果たすものであつたと考えられるのである。

鳥居邦朗は父の生き方を「ぶざま」なものとする一方、「それに対

して『私』はほとんど同情する気配もない」と論じている。<sup>(10)</sup>しかし、本当にそう言い切れるのだろうか。確かに、作品の冒頭に描かれる〈私〉の容貌が父に似てきたことへの嫌悪感や、〈私〉の家庭に割り込んだきた父が厄介者扱いされている描写は一見作品の基調を成しているかのようにも見えるのだが、これまで見てきたように、その深層には〈私〉の父に対するささやかな同情の視線も潜在しているようにも思われるのである。

## 一 (二) 父子関係の変化

前節で見えてきたように、〈私〉の内面には父に対して両面的な感情が潜在していた。ところが、妻の介入により、〈私〉のなかでの父との関係性は微かに変化していくようにも見受けられる。以下、その描写について確認していこう。

〈私〉は、妻の提案で、父が出掛けているうちに電信柱の古材で作った「怪しげな」置物を片付けた。しかし、何日か経って父がそれに気付き、〈私〉を糾問する。そして、〈私〉は父の不満に対して心のなかでこう呟く——「誰が何と云はうと、この家の主権者はオレなんぞ」。

実際、〈私〉は「怪しげなもの」を玄関に置かれることになりに迷惑な思いを抱いていた。置物を撤去しようとも思っていた。にもかかわらず、なぜ妻に言われるまで行動に移さなかったのか。

それは〈私〉のなかで、父というのが紛れもなく血縁上の身内・家

族でありながらも、一方では、正面からぶつかることができないような、いわば他人のような複雑な存在でもあったという事実を示している。それによつて、〈私〉は父に対して上述したような両面的な感情に引き裂かれており、父の不満に対する反発も「心の中でつぶやく」に止めるしかなかった。その意味で、〈私〉と父の間に一定の距離が存在していたのは明らかである。ちなみに、父の出掛けの帰りに、〈私〉がわざわざ玄関まで出迎えたという描写などにしても、かえって二人の関係がよそよそしいものであることを強く印象づけるものとなっている。総じて、「置物を撤回したのは自分にもその意志があつたにもかかわらず、結局は女房の指示にしたがつた」という〈私〉の意識からは、父に対して気兼ねしている様子がうかがえるのである。そして、そのことに対して「心の底にわだかまつてくるのを覚えてみた」というのにしても、それはやはり、自分の意志を率直に父に表明できないというもどかしさが自らの感情の奥底に潜在しているということを表しているように思われるのである。

そんなことがあつたが、〈私〉は「まだおたがひに気心ののみこめてゐない父と女房とに留守を」任せたまま、しばらく泊り込みで仕事に出掛けた。〈私〉は家の様子を見るために、週に一回ぐらいの割合で帰宅することにした。妻と父と娘三人で仲良くしている光景を目にする時、〈私〉は自分がないほうが「かへつて父と女房の間はウマく行くのではないかとさへ思った」が、「それはいかにも絵にかいたやうに明るい家庭で、そのあまりの明るさが不自然に」も思われた。

そして、〈私〉の心配が的中したかのように、〈私〉が仕事場に戻る

と、「電話のベルが鳴った」。「いま、おぢいちゃんが突然怒り出して、あたしとミサ子にこの家をたつたいま出て行けつて云ふのよ」と、妻が「涙まじりに、おろおろ声」で訴えてきた。しかし、〈私〉は「受話器を置くと、なぜか急に笑ひ出したいやうな気分にな」り、次のように語るのである。

一体どうしたといふのだ。私は心の一方で不安のあまりに血液も真つ黒くなり、ものも考へられないほど緊張しきつてゐる自分を意識してゐた。けれども同時に、そんな不安や緊張がひどく滑稽でたまらなくもなるのである。——ことによるとおれは自分の父親に嫉妬してゐるのだらうか？ 私はテラテラと額をかがやかせた父が私の女房の酌で酒をのんでゐる場面を憶ひだしながら、さうツブやく。これは私にとつてもつとも不吉な、それ故にまた滑稽な予感なのである。じつを云ふと私は、自分が母親と二人でゐるところを父に見られるたびに、これに似た不安と滑稽を感じたものだ。そして、いまは父と私とはその立場を逆にしてゐるのではないだらうか？（傍線引用者、以下同様）

引用は長くなるが、この記述は父子の関係性の内実をよく表している部分であり、最も重要な箇所だと思われる。〈私〉／父／妻、という三者の関係が、かつての父／〈私〉／母との関係に擬えられている。しかも、〈私〉の内心に浮かぶ父に対する「嫉妬」「不安」「滑稽」などといった負の感情は、〈私〉にとって父との関係が単なる親子関係を超

えたものとして想定されていたという事実をわれわれに告知するものである。妻に酌をされ、「上機嫌」で酒を飲んでいる父に「嫉妬」を感じてしまう〈私〉は明らかに父を「父親」としてではなく、一人の「男性」として意識している。そうした認識によって、実はそれ自体が過去にさかのぼつて〈私〉と父と母との三者の関係を原型とする潜在意識であつたことが同時に明らかにされる。そのため、〈私〉が、母といるところを父に見られて「不安」や「滑稽」さを感じていたという記憶の種子が、父に対する後ろめたさや疚しさという感情として〈私〉の深層心理で蠢動し続けていたのだという蓋然性がここに暴露されるに至るのである。こうしてみると、〈私〉と父の間になぜこのような距離感が生じていたのかもおのずと明らかになるだろう。

ところが、翌日、妻から父が彼女に手を出そうとしていたようなことが仄めかされると、〈私〉は「急に心の中がカラリと晴れわたるやうな気がし」た。「昨夜来わだかまつてゐた不安な緊張感がほぐれて」、それでもう父との間には「貸し借り勘定はなくなつた、よけいな遠慮は必要ない」と思うようになった。ここでは、〈私〉と父のこれまでの関係性が切断されると同時に、その隙間に新たな関係性を築いていこうとする〈私〉の決意が改めて形作られてきたことが示されている。つまり、これまでは父親と同性の他者という二つの身分として〈私〉のなかで分裂しつつも混在していた父が、後ろめたさの消失とともに、確たる父として統合されることになつたのである。そのような新たな関係性は、小説の中の次の場面で明らかにされている。

一行が玄關の式台にたどりついたとき、女中頭らしい人が私の袖をひいて云った。／「ほんたうに、御家族団欒で愉しさうでございますね。あたくしたちはみんな『ああ、うらやましい』つて申し上げてゐたんですよ」／私は、お世辞にしるこんなことを女中さんから云はれたことは意外であり、もう一度訊きなほさうと、立ちどまつて、／「え」／と云つた瞬間、おもはず正面のガラス戸にうつつた人の影にギクリとした。親ちがこちらを向いて立つてゐる——さうおもつて見たのが私自身の姿だつたらである。

傍線部は、鳥居氏が指摘したように、〈私〉<sup>1,2</sup>が自分の中に父を見出したという事実を意味しているのであるが、視角を変えて言えば、父の中に〈私〉を見出したのだとも言える。つまり、父と〈私〉の同一性という認識が無意識のうちに〈私〉のなかで形作られていたのである。そして、これは実際、〈私〉にとつても大きな変化を表していた。その変化を浮き彫りにするために、もう一度冒頭部を振り返ってみなければならぬ。

冒頭部では、〈私〉の「自分の姿」について次のように述べられている。

しかし、このごろでは私自身も自分が父親似であることを承認せざるを得なくなつた。鏡に向つてゐるときはさうでもないが、写真にうつされた自分をみると、顔といはず全身の姿勢までが不気

味なほどに父に似てゐる。このことから私は、鏡といふものが決して客観的に自己の姿をうつし出すものではないといふことを悟つたが、それ以上に私は一種の無力感にとらはれるのである。

谷川氏はこの鏡と写真に写し出される「自分の姿」の落差を、「鏡」を見るのは『私』であるが、『写真』はカメラという他からの眼を通された像であり、他者に写つた自己の姿であることから、生じるものである<sup>3</sup>としてゐる。つまり、〈私〉が父親似だという事実はあくまでも他人によつて確認されることであり、〈私〉のなかでは、そのような事実はどうしても是認するわけにはいかないという拒絶心理が支配していたわけである。だからこそ、〈私〉は常に「一種の無力感」にとらわれていたのである。しかし、結末部でのガラス——ここではガラスは鏡と同じ働きを持つと考えられる——に映つた人影が父の姿だと見誤るほど父と瓜二つである自分自身に気付き、思わず驚いたといった描写は、〈私〉自身、父に似てきたという事実を受け入れるようになったことを示すとともに、単に似ているという以上の意味、つまり〈私〉<sup>4</sup>父という同一化がなされるようになったという意味を表してもいる。換言すれば、〈私〉と父が紛れもない血縁で結ばれた親子なのだということをもはや否応なしに自己認識するようになったという結果を示しているように思われるのである。そうした意味では、妻と父の対立がもたらした「危機」は、〈私〉にとつては、父との関係を再構築する「転機」になつたのだと見られるのである。

## 二、「ソウタと犬と」について

「ソウタと犬と」は昭和四十三年に『群像』新年号に発表された作品である。これは父の再婚後、息子である主人公の〈彼〉がその新宅を訪問するという内容の作品であり、「家族団欒図」に直接つながる題材の作品であることから、その後日談として読むことができる。本作品は、安岡が父の死後に書いた作品であるが、従来の父親のものでよく見られる父への嫌悪に関する描写がほとんど見られなくなっており、むしろ穏やかな関係性の中で父親が描かれるという点に特徴を持つ。以下では、作品における父親像や父子関係のあり方を精緻に読み解くことで、安岡文学における父子関係の描き方に関する変化の意味を考察していきたい。

### 二―(一) 父の再婚前後の変化

父が再婚することに至った経緯は「家族団欒図」に詳しいのだが、ここで「ソウタと犬と」の内容を引用しながら簡単にまとめて言うと、「年とつて生活能力を失った父親を」「自分の家に引きとつて、しょつ中ヒマを持ってあましてゐる老人にこちらの生活のテンポを狂はせられるため、「父に再婚をすすめて別居」することになった。そして、父の再婚後、「一と月ばかりたつたところで」、〈彼〉は一度「房総の東京湾沿ひのG町に」ある父たちの住居を既に訪れていたのだが、それから二ヶ月後に〈彼〉は再びそこを訪れることになる。そして、二度目の訪

間で〈彼〉は、父が大きく変化していることに気付かされるのである。まず、〈彼〉を仰天させた次のような父の変化を見てみよう。

〈彼〉は父と継母との生活の変わり方に気をやりながらも、不意に庭にある鶏小屋の鶏を覗き込んでみた。すると「ふと胸にこみ上げてくるものを感じた」。なぜなら、寄せ集めの材料で作った小屋は「母な見覚えのあるものばかりであり」、それを一つ一つ見ていくと、「母と三人で親戚の別荘に暮らしてゐるころ、敗戦で軍人をオハライ箱になった父が毎日、気ちがひみたいになつて、トリ小舎の巣箱や餌箱やトマリ木やをつくつてゐた様子が、ひとりでに蘇つて」きたからである。そして、〈彼〉が鶏の産卵状況について父に尋ねてみても、父は「アマイな微笑を浮かべて」「さあ……。このごろは、あれ(継母のこと。引用者注)が世話するもんだから」と答えるばかりであった。その時、〈彼〉は次のように思った。

彼は父親の顔を見上げて、しばらく声をのんだ。手編の靴下の足に、安モノにしろ真新しい庭下駄をつつかけ、両手を帯に突つこんだまま、つくねんと立つてゐる父を、もう一度眺めて、頭から足もとまで父の体のどこにも泥に汚れたあとがないのをたしかめると、あらためて彼は驚きなほした。家を追ひ立てられて、あちこちを転々とする間、いつも父はこの地鶏を真つ先に荷造りし、何処へ行くにも後生大事につれ歩いた。その父が、このトリの面倒を見なくなつたとあつては、ぎょうてんしないわけには行かない。まったく以て、これは一体どういふことか――？

この描写から分かるように、〈彼〉は見覚えのある「トリ小舎」を見て、戦後の混乱期に巻き込まれて生活に苦しんでいた〈彼〉一家のかつての光景を思い出す。そして、その記憶と今まさに目の当たりにしている光景とのギャップに驚きを隠せないでいた。安岡は常に父の養鶏の話を作品に取り込んでいるのだが、それは戦後の安岡家の窮乏を象徴するものでもあった。つまり、この養鶏という「終戦後の生活の習慣」を、周囲に喜ばれることのないまま、十数年も続けてきたにもかかわらず、たったの二、三ヶ月でその習慣に終止符を打ったという父の態度に、〈彼〉は納得できなかつたのだ。言ってみれば、父の養鶏は終戦直後には確かに困窮の象徴であつたのだが、〈彼〉の家に引き取られた時点にはすでにそのような意味を失っていた。それにもかかわらず、養鶏に執着するところに父のレーゾンデートルとしての意味があつたわけだが、だからこそ、その意味をあつさり放棄してしまつたことに〈彼〉は驚きを隠せなかつたのである。しかし、それは同時に、戦後に不如意な生活を強いられ続けてきた父が、再婚を機に、いわば第二の人生で良いスタートを切つたということの意味するものでもあつた。ただ、息子としての〈彼〉はこの時点ではこのことをうまく受けとめられず、ただ「まつたく以て、これは一体どういうことか——？」と首をかしげるよりほかはなかつた。

この他にも父にはさまざまな変化が見られた。たとえば、〈彼〉の母は「ソウタ」——父の郷言葉でいう「袖なしのチャンチャンコ」——が嫌いで、〈彼〉にも父にも一度も着させたことがなかつたのだが、父

は、継母にソウタを着させられていた。それを見て、〈私〉は「どうしやうもない違和感のやつてくるのをおぼえた」。さらには、父を寝付かせようと継母がカイマキを父の体にかけてると、父はすぐ寝付いてしまふのだが、そこで〈彼〉は「蒲団の上げ下げまで自分でやつてみた父のことを考へると、カイマキの襟から半月形の額を覗かせて居眠つてゐる父の顔は、別人としか思へな」かつた、と困惑を露わにする。

このような描写から窺われる父の変化は、いずれも〈彼〉の視点から見えた風景であり、それは〈彼〉の内面における違和感や不快感と連動していた。しかし、短い滞在でありながら、〈彼〉は少しずつ父の立場に立つて、物事を考えるようになっていくのである。

## 二―(二)〈彼〉の父への思い

父の再婚相手は、〈彼〉が妻と一緒にたつて見つけてきた人であつた。にもかかわらず、〈彼〉は、どういふわけか継母に対して嫌悪感や偏見を露わにするのである。たとえば、継母から〈彼〉の家の姓を名乗つた手紙が届いたとき、〈彼〉は「ドキリとし」て「何か、早合点でんでもないことをしてしまつた気がした」といふ。また、「年齢には不似合ひな水玉模様のワンピースを着た」継母が父と並んで座っていた姿を思い起こし、「メマイのしさうな重圧感が蘇つてきさうだつた」ともいふ。このような継母に対する嫌悪感、前節で述べた、父の再婚後の変化に対する〈彼〉の違和感や不快感の描写を想起するならば、まさにそこに由来するものであつたことが察知されるのである。



その継母は一匹の老犬を飼っていた。そして、この犬は〈彼〉に「継母そのものと重なり合ふくらゐ」の強い印象を与える。十八年という「犬としては、ほとんど化けて出さうな年数」をともに過してきただけに、継母にとつてはこの老犬は何よりも大切な存在となっていた。しかし、次のような描写——「この犬に眼を向けることが、タメラはれた」、「出来るだけ、この犬から遠去からうとつとめた」といった言葉から窺われるように、〈彼〉はこの犬のことがどうにも気に食わなかった。それでも、〈彼〉は「義務」として「父と継母との間がウマく行くやうに計らふには」「この犬に親しまなくてはならない」とまで思うようになる。

ところが、〈彼〉は転寝をしている父の顔を見て、「その顔に一頭の老犬を想ひ浮かべ」たり、継母から犬の身の上話を聞かされながら「口をきかぬ父親の顔がセッター種の老犬に見えてきさうな気が」したりもする。そのためもあるうか、〈彼〉は「漠然として言ひやうのない」「不幸な感じがしてゐた」とすれば、この不幸とは何であるのか。それはまた、何に起因するものであったのか。むしろ表面的には、〈彼〉が感じとつた「不幸」とは、継母に犬と同じように調教され、おとなしくなつて何もすることがなくなつた父の姿を指しているのだと考えられるだろう。しかし、〈彼〉が「不幸」を感じた理由はそれだけにとどまらないようにも思われる。

父が再婚したあと、様々な変化が起こつたことはすでに述べたとおりである。これらの変化は決して悪い方向に向かつているわけではなく、むしろ息子としては喜ばしいこととして受け止めるべきものであ

つた。にもかかわらず、なぜ〈彼〉の中で「不幸」という思いが波紋のようにどんだん広がっていくことになつたのだろうか。考えてみれば、父を変えたのは息子の〈彼〉ではなく、継母であつた。さらに言うならば、血の繋がつた、しかも何十年も一緒に生活してきた息子の〈彼〉にはできなかったことが、父と結婚してそれほどの時間も経つていない継母には何のこともなくできたわけである。その事実は、〈彼〉に複雑な思いを突きつけるものであつただろう。実際、〈彼〉がそれに近い心境を仄めかすようなところが以下の文章のなかに見られる。

父は、れいのソウタを羽織つたうへに、継母にヨダレ掛けのやうなもののヒモを頸のうしろで結んでもらつてをり、その傍であるテリア犬が、うらやむ眼つきでそれを見上げてゐる。朝日は彼等の背後から射しており、それはいちべつの光景にすぎなかつたけれども、まるで宗教画をおもわせるほど堅固なコンポジションを示して、もはや傍からこれを突きくづすことは不可能におもはれた。／＼それにしても、彼等のこの宗教的雰囲気をかもし出すほどの調和は、いったい何を基調にしてゐるのだらう？ すくなくとも、それはおれには無縁の何かだ——。そうつぶやいて彼は、まぎれもなく嫉妬の情が自分のなかをよぎるのを悟つた。彼は自分のじつ々の母親の顔をうかべ、悲しげにツブやくのをきいた。「あつしには、あんなこと、出来つこない」……もしかしたら父は、母のやうな女と結婚したために生涯の大半を苦しみぬき、いまやうやくそれをいやすことが出来てゐるのではないか。さうだとすれ

ば、おれは心にヤマシサを感じる必要は毛頭もない。

長い引用となったが、〈彼〉のなかに複雑な思いが存在していることは明らかである。父と継母の間に醸し出される調和的な「宗教的雰囲気」が何を基調としているのかは分からずとも、〈彼〉の心の中に「嫉妬の情」が曝け出されていたのは確かであった。つまり、彼の感情のなかにえたいの知れない不幸な感じが訪れてきたというのもそのような「嫉妬の情」が作用した一つの結果であるとも考えられるのだ。しかし、事の因果関係が明白にされたとしても、或いは継母のおかげで父がこれまでにないような癒やされた生活を送っていることが分かかったとしても、〈彼〉は依然として不幸や不吉なものに取り囲まれたままであった。なぜなら、〈彼〉は未だに父にとって「最も親しかった一人息子」の彼、つまり自分との間に口数が減ってしまったことに悶々とした思いを抱いていたからである。

嫉妬とは、「自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと」<sup>14</sup>を意味しているが、〈彼〉の父への愛情なくしては、「嫉妬の情」はそもそも湧き起こらない。〈彼〉は父の新宅への訪問に対し「重苦しい義務感」を感じるといふふうに描かれてはいるものの、訪問中の〈彼〉は一方で嫉妬を感じたり、苦痛にとらわれたりもしている。これが、父への愛情の象徴でなくて何であろう。ここには確かに〈彼〉の父に対する愛の表出がなされているように読めるのである。結局、不幸な思いを抱いたまま、〈彼〉は新宅に別れを告げたのだが、継母は犬を連れて〈彼〉を駅まで見送りにくる。その継母に対して「意

固地に冷淡になつて行くのをおぼえた」〈彼〉は、ふと皮肉を言つてやろうと思ひ立つ。「こんどくるとき、この犬に、おやちとお対で犬の着るソウタを一つ、おみやげに持つて来て上げませうか」と。しかし、継母の「あたしは体だけは丈夫なんです。おとうさんの面倒は、いつまでも見て上げられます」との一言に、〈彼〉は突然「何かで胸が絞めつけられ、ものが言へなくな」り、「さつきはそんな皮肉を言はないで、よかつたと思」うようになった。そして、今の〈彼〉は「もし、その老齢の犬がこの冬の寒さで死ぬやうなことがあつたら、その葬式はおれが出てやらなくちやなるまい」とまで考えるようになり、そこで小説は終わりを告げる。

「おとうさんの面倒は、いつまでも見て上げられます」という言葉は、明らかに〈彼〉の継母に対するマイナスイメージをプラスイメージへと転換させた決定的な一言であった。また、そもそもその犬に對しても好感を抱いてはいなかった〈彼〉であったのに、この一言により自ら犬の葬式を出してやらなければならないとまで思うようになっていた。そうした変化の根底には、やはり〈彼〉の父への愛情があったのではないかと考えられるのである。

### おわりに

以上、「家族団欒図」においては、子の父に対する嫌悪感が一見、作品の中心に据えられているかのように見えるのだが、作品の細部を追っていけば、実は、子の視線の中には父に対する同情や寛容が潜在し

ていたことが分かった。また、妻を媒体として子と父の間に潜在していた「貸し借り勘定」がなくなることで、かつて子に背負わされていた（無意識下の）近親相姦（母子相姦）という重荷が下ろされ、父との避け難い親子関係が再確認されるようになったということも分かった。

一方、その後日談である「ソウタと犬と」においては、子は再婚後の父のさまざまな変化を鋭く観察しているのだが、その視線には継母に対する嫉妬、不快感が隠されていた。しかし、やがて子は父の内面まで理解できるようになり、しまいにはかつて嫌悪感を抱いていた継母とその愛犬を心のそこから受け入れるようにさえなったのである。そうした変化には、子の父への愛情を感じ取ることができる。

実際、安岡は「ソウタと犬と」について、「ここにあらわされているのは父の最晩年の姿であるが、同時に生前の父と本当の意味で素直に語り合うことの出来なかった自分自身に対するイラ立しさや、慙愧の念といったものが作品の背後に流れていると思う」と、自己反省を込めた思いを語っている。そして、このような思いに至る転機が父の死と深く関係しているのも確かなことであるように思われる。

安岡自身は「私にとって父は長年、ただわずらわしい存在でしかないように思われた」と告白しながらも、「それが何年か前に父が軽い脳出血の発作で倒れて以来、私はなんとなく後盾を失ったような不安をおぼえはじめた」と、父への思いの変化を語っている。

また、『僕の昭和史Ⅲ』でも、「生前の父は、僕との縁は決してそんなに濃くはなかった。（中略）しかし、いまにして憶えば、その父から

僕は何と多くのものを受けていたことだろう。僕の精神に本当の意味で影響をあたえたものは父であり、僕は父の姿から人間の孤独を悟らされた」と述懐している。

戦争中、安岡の父は前後七年間に及ぶ野戦生活を強いられたという。それについて、安岡は「おそらくこの七年間、ロクに気の合う話し相手もなく、終始孤独に過ごしてきたであろうことは想像に難くない」と言っており、父への理解を示している。そして、父が戦地で味わった孤独感を身に沁みるほど実感できたのは外国へ旅行したときであった。父が亡くなった後、毎年海外旅行に出掛けていた安岡は、「旅先で不如意な目にあったり、孤立して取り残されたような気分になったりするたびに、「戦地での父親のことを想い出した」と言い、そのような体験をきっかけとして、戦争によって生み出された父の孤独な内面をようやく理解できるようになったという。

安岡が父から受けた影響が、実際にどのように作品に反映されているのかは改めて検証する必要があるのだが、いずれにしても、父の存在が安岡にとっていかに大きなものであったかは、上述した安岡の告白を通じて切実に伝わってくる。その意味では、安岡が父を描き続けたことの背景には、父に対して自分自身がどのような感情を抱いているのかを自己確認し続ける方法としての大きな意味があったように思われるのである。

注（一）その理由について、山内洋は次のように述べている。「このことはお

そらく安岡章太郎という作家自身が、ながらく『自己の延長として』江藤淳)意識されてきた母親は、私小説的文体に依り血の通った人間に描写可能であったのに対して、父親は、敗戦による軍人の生活無能力者への変貌として多分に戯画化することでしか描き得なかつたことと無関係ではない。(安岡章太郎論―〈父〉の呪縛―)〔大正大学大学院研究論集〕12、昭和六十三年二月)

- (2) 坂井利夫『ある「戦後」の遍歴 安岡章太郎を読む』(どうぶつ社、平成十八年五月)

(3) 服部達は初期の作品では「息子は父親に対して、アルヒヴァレント両面的な態度をとる」(『新世代の作家たち』『近代文学』昭和二十九年一月)と述べており、示唆に富む卓見ではあるが、その両面的な態度というのが具体的に如何なるものであるのかについては明示されていない。

- (4) 安岡の父は昭和四十年に亡くなった。

(5) 両作品の主人公の人称は、それぞれ〈私〉／〈彼〉として設定されているが、作品の題材が直接的に繋がっていることから、両作品は連続性を持った一つの物語として読めるようになっていいる。

- (6) 鳥居邦朗「安岡章太郎 本文および作品鑑賞」(鳥居邦朗編『鑑賞 日本現代文学』28 安岡章太郎・吉行淳之介) 角川書店、昭和五十八年四月)

- (7) 三島由紀夫・庄野潤三・安部公房「創作合評」(『群像』昭和三十六年九月) 引用は『日本文学研究資料叢書 安岡章太郎・吉行淳之介』(有精堂、昭和五十八年十一月)による。

- (8) 石原千秋も三島や江藤淳(『文芸時評』昭和三八年)の発言を援用し、

次のように指摘している。『家族団欒図』は安岡の転機を示す重要な作品である。(中略)すなわち、この作品の『父親』は『自己客観化』(江藤淳の発言。論者注)のための仕掛けとしての意味合いがあるので、そこに安岡の『展開点』があるのだが、『無理やりに父親と自分と同じだと主張』することで『逃げ』ており、『そこが今の彼の危機』だ、ということなのである。そして、昭和四十年代に書かれた二つの長編は、安岡の『危機』を如実に物語っている。(安岡章太郎研究史案内)『日本文学研究資料叢書 安岡章太郎・吉行淳之介』同前掲書)

- (9) 谷川充美「安岡章太郎『家族団欒図』論」(安田女子大学大学院文学研究科紀要13)平成十九年)

- (10) 鳥居邦朗(同前掲書)

(11) 鳥居邦朗は安岡文学における父子関係の特徴として、次のように指摘している。「安岡の場合、母と子の関係は比較的コンパクトな二人だけの関係となる傾向があるのに比べて、父子関係はその間に第三者を介してあらわれる。ことに父と息子と息子の妻とという三者の関係になるときに、それは従来の近代小説における父と子の問題とは様相を異にするところがある」。(同前掲書)

- (12) 鳥居邦朗(同前掲書)

- (13) 谷川充美(同前掲論文)

- (14) 小学館版『デジタル大辞泉』(平成二十四年四月)

- (15) 安岡章太郎「著者から読者へ 私自身の“小舎”」(安岡章太郎『走れトマホーク』講談社、昭和六十三年六月)

(16) 安岡章太郎「後書」『安岡章太郎集4』岩波書店、昭和六十一年十一月)

(17) 安岡章太郎『僕の昭和史Ⅲ』(講談社、昭和六十三年九月)

(18) 安岡章太郎『僕の昭和史Ⅱ』(講談社、昭和五十九年九月)

(19) 同(注16)

\*テキストの引用は、『安岡章太郎全集5』(講談社、昭和四十六年五月)による。なお、ルビは省略した。

(よう しゅうび、台湾南台科技大学助理教授)